

**The
Japan
Interior
Designers'
Association**

JID

no. **76** 1976.oct.20



渡辺力氏紫綬褒章を受賞

渡辺 優

渡辺 力さんが紫綬褒章を受けられました。本当に嬉しいことです。

私にとっては、大先輩であると共に、大変お世話になった恩師でもあるので、先生と呼ぶべきかもしれませんが、誰もが敬愛の念をこめて呼んでいるリキさんといわせていただく方が、自然のように思われます。

力さんは日本のデザイン界のパイオニアであるばかりでなく、純粋な追求の姿勢を貫いて来られ、いわば日本のデザインの良識を代表するひとりだと思います。

昭和31年以来、Qデザイナーズを主宰されていますが、このQという名はqualityのQであるということは、いかにもデザインの質を大事にされる力さんらしいという気がします。

力さんのデザインを評して、禁欲的という形容が使われることが多いようです

が、確かに脆弱で見せかけのデザインに對しては、厳しい態度をとられ、私なども器用過ぎるのはいけないと諭されたものです。

ひも椅子を始めとする作品については、こゝで述べるまでもありませんが、日本の土壤に根ざす強い個性に對して、多くの共感と高い評価を受けて来られました。また、文筆の方での活躍も衆知のことです。

当協会にとっても、創立のメンバーであると共に、多年に亘って理事等の役員として、中枢的な役割を担って来られたわけですが、時の様々な流れに、ともすればふらつき勝ちな協会の方向を、しばしば強い発言で正されて来ました。

今回の褒章は文化庁から推されての受賞ということですが、力さんのようなデザイナーの功績が、そのような面から評

価されたことは、日本のデザイン界全体にとって、大変意義深く、喜ばしいことだと思います。

当協会監事渡辺力氏には、この度紫綬褒章の受賞が決定し、来る11月22日教育会館において受賞式がとり行なわれる趣で、誠にお目出度いことです。

当協会員としては、今春の豊口克平氏の叙勲にひきつづいての慶事で、これらはいづれも“デザイン”ということでの受賞で、デザイン界にとっても、一つの黎明を告げる画期的なことであるといえましょう。

なお、同氏は昭和33年協会の創立期に入会し理事に就任、昭和45年度から再び理事として、本年度からは監事として、協会のため貢献をつづけている方です。

各事業支部だより・特集

JID・76号の内容は会報というよりはむしろ事務局ニュースの感を呈している。しかし、これらの活動を通読して言えることは、いずれも高密度社会への質的な発展に対する強い動きであり、又、我々協会に対する公共の発展に寄与することへの要請であるとも云えよう。

私達広報委員が計画する新しい会報の検討のはざまに表われた未熟児としてよりは、新しい局面を迎えている協会に適應する冊子を送り出す期待として受とめていたがきたい。

この3～4ヶ月の間に各委員会によって計画され、実施されている活動の主要なものをとり上げると今号に掲載されたものを除いて以下になる。

【本部渉外委員会】

■トータルインテリア・ショーへの協力。
10月28日より11月3日迄永福町の展示場で行われたプレハブを中心とする住宅の総合展示である。朝日新聞から抜萃した通産大臣の言葉を借りると——住宅の工業生産化を推進すると共に住宅設備機器やインテリアについてもその望ましいあり方と供給体制の方向についての総合的な空間システムの推進——の意図を持つもので、昨年住宅産業課の編集になる「インテリア産業の現状」の具体化である。

■東南アジア・デザイン研習生に対する協力。日本産業デザイン振興会の推進する研習制度であり、研習生に対する講義、研習課題の一つである COOKING & EATING に対するデザインチェック等、本年度担当であるJIDAへの協力する形で行われた。(来年度は当協会の担当でありその協力体制について協力をせまられている)

■海外デザイン視察団の編成、当協会のIFI(インテリアデザイナー国際連盟)への加盟を契機とする、その本部の訪問と懇談を中心としている。(52年1月実施)

本部特別事業委員会

■地方産業デザイン開発推進事業への協力。産デ振の組織である地方デザイン開発センターによって昭和50年度より開始された事業への協力は、会員応募者の内から大分県・日田及び徳島県・徳島の2つのプロジェクトに対しそれぞれ山岸桓史、今崎努、長岡貞夫の各氏と山口勇次郎、中村圭介、福岡喜久雄、箕原正の各氏による2チームが選考委員会によって編成され実施指導事業にあたることになった。

なお、上記各氏を含む応募者全員によるデザイン振興開発整備事業としてのマ

スタープラン作成も同時に行われ、共に52年3月を最終に指定されている。

■JID・フォーラム、住空間推進3カ年計画を軸とするJID・フォーラムの実施はその定期的な会合を重ね、主題への提案、検討が行われている。

関西事業支部

■トータルインテリア・ファッションフェア・'76への協力。「ニューファミリーとインテリア」を主題に10月28日より11月1日迄大阪・阪神百貨店における上記のショーは大阪デザインセンターへの全面的な当協会の協力で行われた。

中部事業支部

■住みよい住いのマイホームセミナー、中部新聞社、ナゴヤハウジングセンター、及び当協会の共催で51年9月より52年8月迄月1回の予定で消費者を対象に行われる。

関東事業支部だより

講演会雑感

去る9月3日、農林年金会館にて、「米国の住宅産業とインテリア」と題して、現在ロサンゼルスで活躍されているプランナーで建築家の石井孝明氏(エコー・デザイン・インターナショナル社長)の講演会が開催された。

在米12年の石井氏はその豊かな体験を、ユーモアある話ぶりで満員の参集者の笑いをさそいつ、米国における住宅開発の多くの実例を述べられ、2時間におよぶ会も盛況裡に終わった。

講演で石井氏は住宅開発がまずランド・プランニング(都市開発)から始まり、つづいてサイトプラン(住宅、ショッピング、リクリエーションエリアの配置計

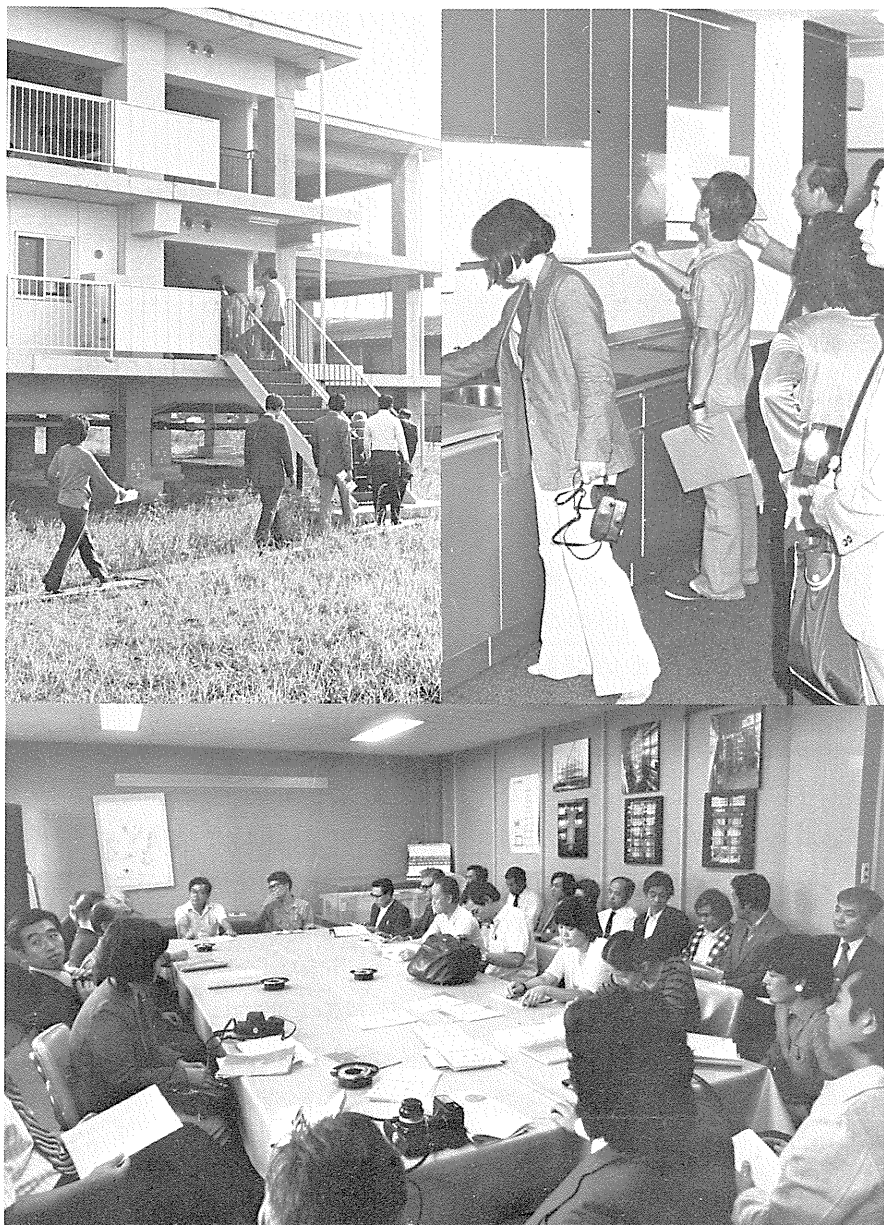
画)に進み、最後に建築、造園、インテリアなどのデザインに移行してゆく過程をスライドを示しながら説明された。

米国の住宅開発の主流は個々の建物を売るのではなく、その環境、つまり住宅をとりかこむ風景全体を創造し、それを売ることが開発の基本であり重要であること、そのために出来るだけオープンスペースを取り豊かな空間を作りだすことが計画のキーポイントであり、さらに限られたスペースにいかに有効に建物をレイアウトし、そのデンスター(住宅密度)をあげるためにタウンハウス(集合住宅)が最もふさわしい解決方法であること、又住宅デザインも個性的なものはさけ、風景にとけ込む地味で落ちついたもので統一することが良い環境作りであることを強調された。

一方、インテリアデザインにおいては建築のユニフォーミティーに対して逆に生活のにおいが感じられる個性的なものでアレンジ(デコレーション)することが望ましいと結んだ。

以上が講演の要旨であるが、石井氏の指摘をまつまでもなく日本の住いかに遅れ、貧困であるか多くの美しいスライドを見るにつけて絶望感におそわれたのは私のみではなかったと思う。

広大な土地を持つ米国と日本とでは比較にならない迄も、我が国の住宅の貧困は土地問題に起因していることは言うまでもない。最近の司馬遼太郎対談集《土地と日本人》の中に「東京のホテルで、ジュース一杯が700円する」のは土地の値段からきていると解き「大地についての不安は、人間をして自分が属する社会に安んじて身を託してゆけないという基本的な不安につながり、私どもの精神の重要な部分を荒廃させた」と言い、さらに「日本に一番欠けているのは、地面



に対する思想」とも言っている。

今回の講演会とあわせ考えさせられる。

長岡貞夫

KEP 住宅見学会

去る9月10日部品化住宅の見学会が行われた。部品化住宅とは日本住宅公団で研究開発されつつある企画でKEP(Kodan Experimentol Housing Project)と名付けられているものであり、公団の説明によると、内部構成部品のシステム化、オープン化のルールの開発を目的とした

関西事業支部だより

実験プロジェクトで、昭和48年度より企画したものだそうである。

今回は2月から一般公開されている八王子にある日本住宅公団総合試験場を尋ねた。当日は午前中から雨模様で、参加者が少ないのではないかと心配されたが、出発の時刻までには集合場所の千駄谷駅前には40名近く集まり、チャーターした大型バスに乗り込み、ゆったりとした車内で八王子に向けて出発した。目的地に着いた時には雨も上りさわやかな初秋の陽が顔をのぞかせはじめていた。参加者一同は会議室に於て公団担当者よりKEPについて簡単な説明を受けた後早速モデルルームの見学に入った。実物を見ながら各自の気の付いた点や問題点など、現場で細かく質疑応答が交わされた後再び会議室にもどり、活発な意見の交換がなされた。ただ、KEPのモデルルームを見た限りでは決して住心地のよい住空間とはいえないような気がした。バスは試験場の後に懇親会々場に到着したが、各地から集められた民家が緑の森の中に点在しており、雨上りの霞と共に神秘的な雰囲気をつたわせた野鳥料理の「うかい鳥山」であった。私達は暖か味のある民家の中で床に腰をおろし、くつろいだ気分飲みかつ食べながら、「これが人の住いだ。」と思いつつ楽しい一時を過ごし、すばらしい一日が終った。石黒正範

●インテリアイメージ75、期待される「住まい」の装置展は終った。

関西事業支部は昨年11月17日—22日に開催した50年度特別事業のインテリアイメージ75期待される「住まい」の装置展と併催「うちとそこから考える日本の住まい」講演会を、いろいろの問題点をはらみ、露呈しながら終了し、引続き会報委員の中村隆一氏を軸に50年度事業の記録整理に支部メンバーが集まり、20頁の会報No73・74合併号として50年度末3月31日やっとの思いで印刷完了、発送することが出来た。会場に展示した「物」は白黒写真の印刷ではリアルな記録にはならないとしても、同時併催の講演内容はそっくり完全記録し得たことで大へんな好評をいただき、50年度をふりかえって、その事だけでも関西事業支部にとって貴重なモニュマンであったと思う。

●51年度特別事業

隔年に続けられた特別事業の作品展を不況低迷、低成長の中で今後も何らかの形で継続するにしても51年度はメイン事業の谷間の年、50年度の反省や52年度事業のラフスケッチの年、正会員・賛助会員増強の年、大阪デザインセンターに事業支部の事務委託の年、見学会・研究会・親睦会を各1・2回で終る支部スケジュールに、突然財団法人大阪デザインセンターからセンター主催のインテリアフ

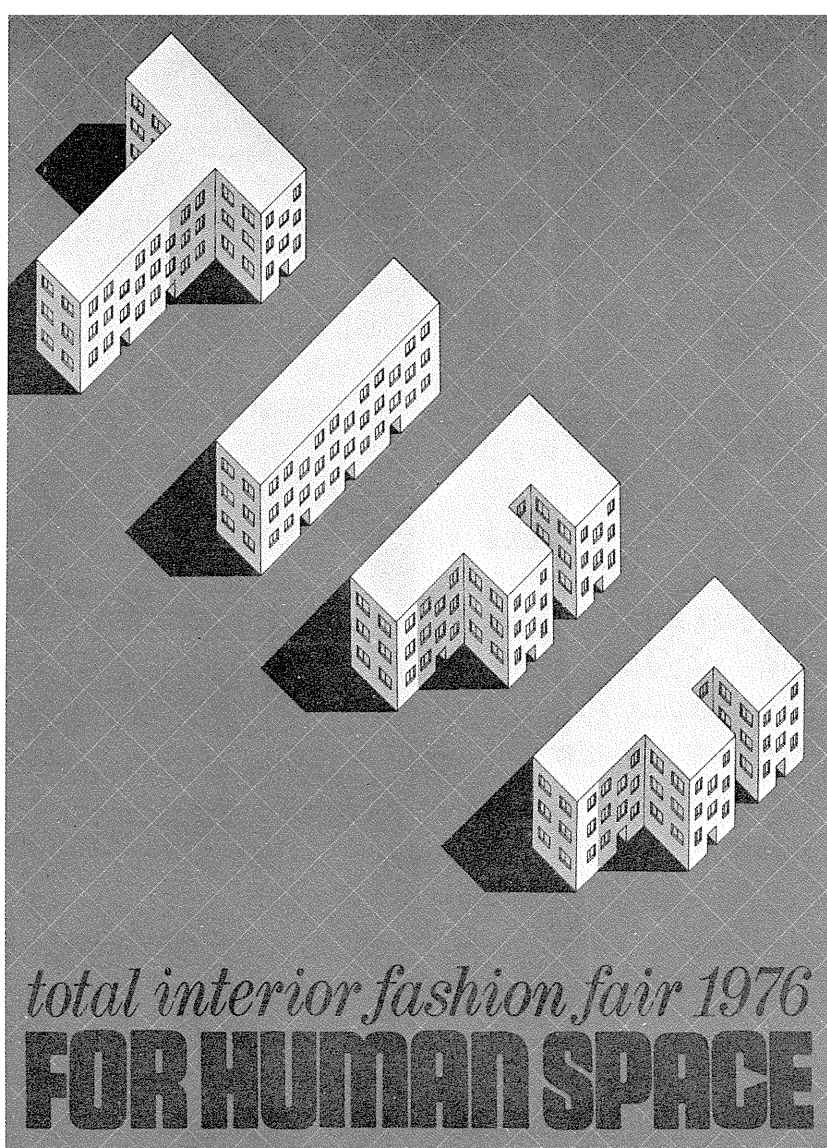
ェアの会場構成と市販商品のコーディネートによるモデルルーム（10室）構成に協力されたいとの依頼を受け、5月27日の通常総会、7月20日関西事業支部総会に計り、支部事業担当の岡村理事がまとめ役となって、全面的に下記のイベントに協力することになった。

●トータルインテリア ファッションフェア

開催要綱

1. 開催趣旨

わが国の住宅問題は今や量的充足よりむしろ質的向上に重点が移り、また所得の上昇と生活様式全般の合理化、快適化の欲求増大によって、住生活の洋式化が進展し、これにともなって各種インテリア関連商品の需要が高まり、将来さらにその伸長が見込まれています。インテリアは機能的にも、美観的にも快適な住環境向上の大きな要素であることは申すまでもありませんが、今後の方向としては、ニューファミリーに代表される新しい生活構造、生活価値感に即したトータルインテリアシステムを推進することが重要な課題となってきました。この観点から本フェアにおいては、ニューファミリーを主体とした消費者のインテリアに対する正しい理解と認識の向上をはかるためすぐれた各種インテリア商品をコーディネートした好ましい住まい



方、使い方のトータルインテリアシステムを広くP・Rするとともに、それらの商品の需要を喚起し、わが国インテリアの健全な発展に寄与したいと願うものであります。

2. 名称

トータルインテリアファッションフェア'76

3. テーマ

ニューファミリーとインテリア
——楽しい住まいづくりのために

4. 会期

昭和51年10月28日（木）—11月1日（月） 5日間

会場

大阪梅田阪神百貨店 8 F 催場

約650㎡

主催

財団法人大阪デザインセンター

後援

大阪府・大阪市・大阪商工会議所

協力

社団法人日本インテリアデザイナー協会

5. 内容

1. 市販商品のコーディネートによるモデルルーム（10室）日本インテリアデザイナー協会のメンバーによる提案

●リビングルーム ●ファミリールーム ●ダイニング ●キッチン ●ダイニングキッチン ●バス洗面ルーム ●ベットルーム ●チャイルドルーム ●マイルームなど

2. 小間による展示販売

3. 商品単位による展示販売

4. 半製品家具コーナー（手づくり家具・日曜大工道具）

5. カタログコーナー

6. インテリア相談コーナー

7. 実演コーナー（タペストリー・シャギー他）

●協力する関西支部のメンバー

■特別事業委員長 岡村 実

■モデルルームコーディネーター

リビングルームA 中村隆一

〃 B 林 栄一

ファミリールーム 村尾 栄

キッチンルーム 喜多俊之

ダイニングルーム 柘植一毅

ダイニングキッチンルーム 並川拓史

バス洗面ルーム 富田卓司

マイルーム 山口道夫

チャイルドルーム 佐々木恵子

ベッドルーム //

■会場構成 富田卓司

※各コーディネーターは各自コーディネート趣旨説明をします。会場写真と共に、次回会報に掲載したいと考えています。

●関西事業支部はこのフェアに期待しています。

「住まい」づくりと「住まい」方の情報ステーションとも云える常設展示を長期計画で実現するための布石であると同時に、これをバックアップするインテリア関連企業の懇話会メンバーづくりにもなり、これからの「住まい」のFORMを見つけ出す貴重な資料がこのイベントから生まれるのではないかと考えます。

関西事業支部 富田卓司

九州事業支部だより

木賊考

木賊或は砥草と云う字のとくさは、智識としては知っていたが、実物を使って見たのは50の年を越えてからだ。其の後、気に入って庭の一隅に植えて折にふれて愛用している。

とくさは葉も花も実もなく、つんつんと茎が垂直に立っているだけで、浮世の派手な花鳥の図には縁なきが如く、つくねんと立っている地味なダークグリーンのは姿は、原始的であり、素朴であり、一方には茶道の粋を尽くした洒脱な佇まいをしている。そして朝日夕日等の陽光を浴びての緑色はまた一段と美しく映えて抜群の冴えた緑光を呈する。

さて人間生活との関わりではモノ作りに研磨仕上げの材料として役立ち、とくさに勝るサンドペーパーなしと云われる。サンドペーパーにすれば1000番に相当するであろうか、砥ぎ磨きつやを出すに到るまで極めて効果的に作用する。

その効能は木製品の素地仕上げ、陶磁器の素地仕上げが、本命と思われるが、金属製品の磨き、鍋釜のこげつきとり、ボールペンの消しゴム、マニキュアにもよく、生花の垂直線の強調等にも役立つと思うが、茎だけあってその茎がもつ効用である。

1 昨年10月9日3時を期して友人数名我が家に集い「とくさ会」を発会した。とくさを十九三にもじっての日取りで、モノ造りが商品化のため、本質を失い勝ちな、作る楽しみ、使う楽しみ、触れる

楽しみ、見る楽しみ、語る楽しみでの集いとし、売らないものを持ち寄って談義をする、材料と道具を持ちよって語り乍ら作る、と云うようなのんびりした会とすること等を話し合い、3ヶ月に1回位は開こうと云うことで昨年小生の家の事情で休会しているがむしろ将来のたのしみとして、そのうち再開しようと思っている。

こよみをつくり時計をつくって来た人間も、現在ほど時間に制約される人間社会になろうとは思っていなかっただろうに、忙しくなる世の中にも、とくさのようにつくねんと生きていたいと思います。坂本康四

日田の家具を対象に デザイン開発実施指導事業がスタート

地方産業デザイン開発推進事業

大分県は昭和50年度に通産省の推せんを受けて地方産業デザイン振興開発体制としての大分県特産品開発振興会議を設置し、51年度には産地デザイン開発体制として、脚光の家具の産地日田に日田家具デザイン振興会議を設置することになりました。この事業については当協会員の高藪昭氏に産デ振の立場から、また白石理事長には地方デザイン開発センター（産デ振）の専門委員として、何回もおいでいただき、指導を受けているところです。今年はいよいよ事業の本命であるデザイン開発実施指導に入るわけですが、この場合のプロジェクトチームへの参加希望については先般理事長名で正会員各

氏あて文書が届いているのでご承知のことと思います。私達地元会員は研究機関、業界代表、デザイン研究グループなどで構成するワーキンググループとしてこの事業の推進に当ることになっています。

日田の家具は産地としての順調な発展が災い？してか、デザインの的にはいつも問題にされていましたが、この事業を機会に一つの洗礼を受け、現代のリビングに抵抗なく溶け込める健康な家具の産地としての再生を期待しています。プロジェクトチームに参加される会員の方のご指導に大きな期待をしておりますので、よろしくお願いします。

'76. 9. 24 中川千年

近頃考える事

福岡市天神の地下街が本邦最後の工事というふれこみで、9月10日オープンした。重厚さ、落着き、格調といったものを求めて19世紀ヨーロッパに範を求めたという。私にはこれが解せない。事実何故19世紀ヨーロッパ風にするのかについて、種々疑問が出たらしい。そしてそれを鉄と石とレンガで構ってその雰囲気を出したといっているが、出店の全部が19世紀には入れる業種ばかりではないし最初からそこには何かの妥協が必要であった筈だ。防災上の強い要求が鉄と石にあったならそこから、それではと19世紀欧風が……という図式が導かれたように思う。そのせんさくが主たることではない。通路の照明を暗くし店舗を浮き出すようにしたという。店は殆んどスポット照明ばかりで全般照明と局部照明という演出はない。天井一杯にならんだスポット器具がやたらに目立ち、その光のあても一方光線的で、赤っぽい色が当り影を濃くし、店員の顔等もきつい陰が出来



て、柔らかさが見られないのは、これは19世紀の革命の世紀にふさわしいどぎつさと受取った私は、いやらしい皮肉屋だろうか。蛍光灯照明をさけようという風潮が出て来たせいだろうが、効果的、機能的照明からいっても蛍光灯は捨てられないし、経済的にいっても必要なものだと確信している。要はその使い方ではないだろうか。店舗の演出に光源の種類が多い程うまく使いわければ効果は大きい。

天井の鉄製唐草。デザインはおざなりで、曲線でうずめたひどく幼稚で格調高いとはとても言い切れない。そこに明るい光が当たらないのは幸いだ。

何だかアラをほじくり出してつまらないことを言っているようで、言いたくないことがあるのだが、心にそまないしくたびれを感じる。日本の中で、19世紀ヨーロッパ等……。商店街としての機能と都市の中の公共的なパートとしての機能と

市民の楽しい場所にするということを先にして、現代日本の中で一番新しい優秀なものにでももらいたかったというのが地元の我々の願いであったのだが。

堤久夫

福岡市天神町

福岡は今年で人口100万都市となり福岡市天神に日本でも最後と云われる地下街が完成した。これを中心に隣接するビル内集団の商業施設の再改装と大規模小売店舗の出店と、目まぐるしい東京、大阪の二の舞か、ドーナツ化現象前の新しい街づくりというか、物販店及飲食店の激戦が、展開されている。

今回は地下鉄開通と福岡の今日このごろ新設天神地下街は天神町と云う一等場所の交差点を中心に南北に360Mの長さで巾8.0Mと5.0Mの公共通路2本で通され、各隣接ビルと階段、エスカレーター等で連絡通路を持ち、2本の公共通路沿いは両サイドに保障金坪当り300万—350万円の大小物販店92店舗と飲食店舗16店舗の15—40坪面積単位の合計108店舗が

出店し、プレゼントの街、おしゃれの街、レジャーの街とグレードの高いイメージで構成され、通路は公共通路として使用され、通路のデザインイメージは19世紀から20世紀初頭ヨーロッパ中北部の都市と云うテーマでデザイン処理されB2駐車場380台 possibleの規模で9月10日にオープンしたばかり。

尚今年初め大丸の天神周辺移転開店と大型専門店天神ユアーズビル店が今年8月にオープンしたばかり、又後方にフロア一面積大のキーテナントニチイを中心にした大型専門店が今年11月にオープン予定、又天神交差点岩田屋デパートが新館増築、今年10月9日オープン予定と隣接する天神ビルB1食堂街15店が地下街対策として9月1日に新装オープンしたばかり、以外に増改装計画が数々と商業地域の激戦の地と化している。

又地上では街の美化運動の一つとして地下街完成と同時に、天神交差点部分であるが、緑の環境作りが完成と云った福岡天神のデザイン論は別にしての簡単な福岡の情報まで。

九州事業支部 香月寿一

中部事業支部だより

前々から懸案になっていた「住いとインテリア」のセミナーが当協会と中日新聞本社及びナゴヤハウジングセンター三者の主催によって開催の運びとなり、この9月から来年8月まで毎月一回行われる。その第一回目は9月25日の午后に催され、初めに「住いとインテリア」とい

うことで当事業支部の松本が講演し、次いで東工大教授清家清氏によって「住みよい住いとは」の演題で講演が行われた。

要旨は「家族構成とその年齢経過によって生活の周期が変化するものだから、住宅に対する考え方もこれに合せて、30代では子供が小さく出費も少いが、4・

50代には子供が成長し、教育費に金がかかる。60代になれば子供は独立し、老夫婦の出費も少なく、大きな家に住む必要もなくなる——というようなことから住宅についても対処を考えることが望ましいこと、なろう。ところで住いはプレハブにしても注文建てにしても、外観だけのカッコよさだけにまどわされないこと。あまり複雑な屋根は、雨もりの原因になりやすい。畳もこの頃は特別な大きさにして実際にはその広さがなくても畳だけ

で呼称することもあるから十分の注意が必要である。住いというものは最初から馴染んだものは殆ど無いものであるから、住いながら自分に合わせるような、手直しの暮しというような考え方が必要なことになるのではないだろうか——。」

当日は講演会としては珍しい広い緑深い野外の広場に来会者約60名程が秋の陽を浴び乍らリラックスして聴き入り、噴水の傍の演壇に差しかけられた爪折傘の朱色が陽差しに赤々と映えていた。

この催しの10月には白石理事長、11月は長氏などJ I Dメンバーの多くと日本建築家協会の会員や名大の柳沢教授などの、ご協力も得られる予定である。

この他未だ発表の段階に至らないがこの地域では初めてのデザイン関係の総合的な協議会の運び計画されているが、もう少し内容がととのってきた上でお知らせしたい。松本政雄

■賛助会員

朝日木工(株)豊川工場
(株)コスガ
(株)天童木工東京支店
飛驒産業(株)
ネコス工業(株)
古川工業(株)
(株)ホウトク
フランスベット(株)
(株)オリエンタル中村百貨店
(株)大丸装工部
国際インテリア(株)
(株)モダン・ファニチャー・セールス
日本総業(株)(エアボン)
クラレインテリア(株)
(株)ホクサン
(株)木村屋
三好木工(株)
愛知(株)
(株)コトブリ
セミカインテリア

住江織物(株)東京支店
トーソー(株)
長谷虎紡績(株)
藤井毛織リビング(株)
内一商事(株)東京営業所
(株)カワキチ
(株)サンゲツ
(株)サンゲツ東京店
アイカ工業(株)
東洋ゴム工業(株)
富国(株)
(株)高島屋
(株)高島屋東京支店設計部
(株)ニック(N I C)
(株)ハヤミズ家具センター
揖斐川電気工業(株)建材事業部
(株)トップトーン
東濃陶器(株)
(株)アイ・エム・エス
(株)日建設計
(株)カフアドハウス

(株)竹中工務店東京支店
(株)ファースト東京支社
(株)商園
(株)小川商店
(株)川島織物東京営業所
(株)東光堂書店
松下電工(株)
ヤマギワ電気(株)
共同通信工業(株)
(株)新宮商行東京支店
(株)フジエキスタイル
(株)アルフレックスジャパン
中央設備エンジニアリング(株)
日本ビクター(株)デザイン部
内外木材工業(株)東京支店
同社東京支店分室
(株)三平興業装飾部
共同印刷(株)
ホウトク販売(株)
鹿島建設(株)建築設計本部
山田照明(株)

(株)森 伝
(有)ビジュアルブレン
(株)武藤精密
(株)ジャシー
浅野産業(株)
MAAM INTERIOR
寿屋木工(株)
昭和エフキヤスト(株)
ロイヤル(株)
(株)西武百貨店家具装飾部
西和インテリア(株)
(株)北新合板製造所
ユニオン装備工業(株)
日本板硝子(株)東京支社
帝人リビングシステム(株)
(株)カスタムインテリアデザイン
ワコールインテリアファブリック事業部
立川ブラインド工業(株)
光建産業(株)
日本鋳業(株)

■編集後記

■おくれげながら76号をお届けします。各事業支部の活動状況を中心に、各地での話題を拾った原稿が寄せられましたので、各支部ごとにまとめてみました。

■“協会の会報はいかにあるべきか”といういささが原則的な部分で逡巡をくりかえしています。発行が遅延している主たる理由はそこにありますが、このことが、今振りかえらなければならない、最も大切なことであろうと思い、委員長をはじめ、じっくりと取り組

んでいます。ご期待いただくと同時に、何らかの形でご参加くだされば幸いです。お便りなり、お電話なりで、“こう思うが”とご教示ください。(六)

会報委員〔東京〕泉 修二 光藤俊夫 山岸榎史
長谷川六 長堀映司
〔関西〕中村隆一
〔中部〕林 寅正 八代美代子
宇賀敏夫 安藤 清
〔九州〕中川千年 香月寿一 堤 久夫

機関誌・JIDNO.76

発行人——白石勝彦
担当理事——川上信二
編集人——JID会報委員会
発行所——社団法人日本インテリアデザイナー協会
住所——〒150 東京都渋谷区神宮前2-3-16
建築家会館3階
電話——03(403)3649
発行日——昭和51年10月20日
印刷所——広洋印刷株式会社
定価——300円
振替——東京・76389